

近代における出産習俗の変容

— 福島県石川郡石川町を事例に —

合原 香須美

目 次

はじめに

1. 出産にいたる過程
2. 出産と産後
3. 安産祈願

むすびにかえて

はじめに

現在の出産の多くは、医師の立ち会いの下に医療機関で行われている。わずかに398名の超未熟児の成長、妊産婦死亡率の低下など、その恩恵ははかり知れない。しかし、世の中のそうした功績に基づく「医療は万能」という考え方は、一方で妊婦に「産む」という意識ではなく「産ませてもらう」という意識をもたらした。医師に任せておけば安心、万一のときでも最先端の医療で母子を救ってくれるのだという絶対的な信頼を寄せている。しかし、出産とはそれほど医学の介助を必要とするものなのだろうか。かつて、今日のように医者にかかることでさえ満足にできなかった時代の女性達はどのような「お産」をしてきたのだろうか。本稿では、福島県石川郡石川町の事例をもとに考えてみたい。

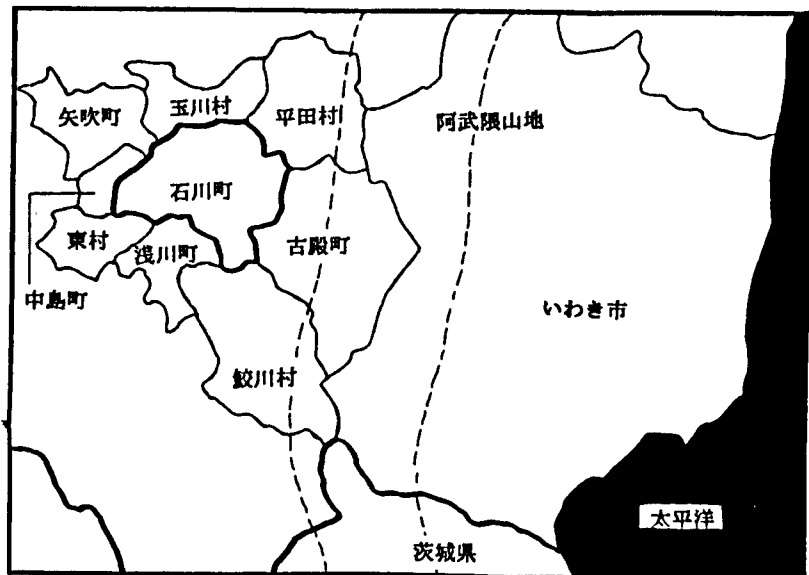


図1 石川町とその周辺

石川町（図1）は県南部に位置する、人口およそ21,000人の町である。昭和30年3月、旧石川町と沢田、中谷、母畑、野木沢、山橋村の1町5ヵ村が合併して成立した。東に阿武隈山地を仰ぎ、西に阿武隈川の流れを見る、東部の山間部と西部の平坦地とに分かれている。町の産業は、米・葉タバコを中心とする農業が主として行われている。また、JR水郡線の輸送力を利用して、製材・木工業も行われてきた。石川町は「水晶の町」ともよばれ、鉱物資源の種類が豊富であり、産出される石英（水晶）、放射性鉱物など、100種類以上の鉱物が装飾や電機関係の材料に利用されている。さらに温泉（ラジウム泉）が散在しており、その医療効果には定評がある。なかでも母畑温泉には源義家の、猫啼温泉には和泉式部の伝説が残っており、古くから人々に親しまれてきた。「石川町」の町名は中世の荘名によるもので、地方市場町として発展してきた歴史があり、今日でも郡行政の中心地となっている。また明治8年、政治結社「石陽社」が河野広中によって設立され、福島県における自由民権運動発祥の地となった。

ところで、出産の習俗について考えるときに、不可欠かつ、多大な影響をもつものとして「産婆」の存在があげられる。筆者がめぐりあったオサンバサンA氏（明治34年生まれ）について、彼女の話をもとにしながら、その略歴を述べておく。

彼女は、石川町の多くの女性から信頼されてきた人物であり、多くの子供達をこの世に送り出してきた。「そのなかには、生まれた子供が障害をもって生まれたときもあってね。そんなときは、殺してくれって頼まれたこともあった。わたしは、そんなことでできませんって断ったけど、殺されてしまったこともあったようだったよ。」と、語った。彼女は、大正時代、20代のころに助産婦の資格を取り、病院で勤務した後、独立して産婆となった。日本国内における、いわゆるシロウトサンバから有資格の助産婦への過渡期は、明治末期から昭和初期にかけてのことである。したがって、彼女はちょうど過渡期から活躍し始めた「体験からではなく教育機関で学んだ」新しいオサンバサンだったのである。彼女が用いた器具も近代的なものであった。

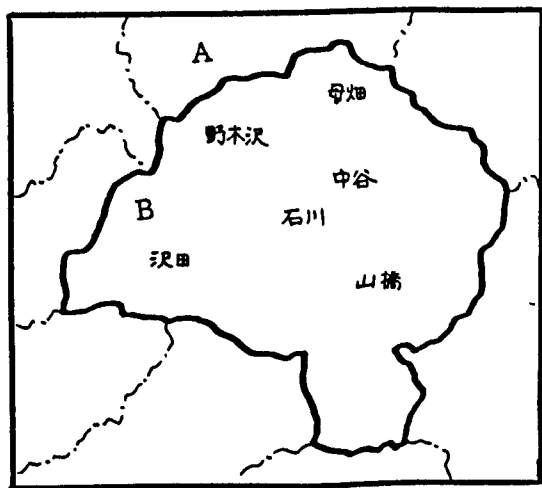
さて、ここで注目したいのは彼女の経歴である。それは日本の助産婦達の歴史そのものでもある。すなわち、石川町の出産の習俗の変容には、彼女の経歴が大きく関わっている可能性があるのではないだろうか。

今回は旧行政区をもとにして、とくに母畑地区、沢田地区、山橋地区を対象とした（図2）。また、A氏の他に、大正から昭和初期にかけて出産を体験した石川町の女性約50名の協力を得て、聞き書き調査を行った。本稿では、これまでに収集した資料を提示し、今後、近代における出産の変容をとらえていくうえでの若干の指針としたい。

図2 石川町



- ① この道は、平田村を経て、郡山市—いわき市を結ぶ国道49号線と交わる。
- ② 旧御斎所街道
- ③ 国道118号線



- A 玉川村字山小屋「オシヨウニンサマ」
- B 字新屋敷「安産地藏」

1 出産にいたる過程

妊娠の判断の仕方は人によって様々であるが、およそ、次の2つに大別できるかと思う。

① 妊婦が自分で気付く場合

② 実母や姑が妊婦の様子を見て気付く場合

①の場合は、体の変化（月経の停止やつわりなど）によって知るものである。それに対し、②の場合は、実母や姑が妊娠の兆候をみせたときに「妊娠したのではないか」と教えるものである。どちらの場合も、最終的な判断するのは多く産婆であった。

さて、妊娠が確認されると、5カ月目の戌の日に、オサンバサンに腹帯を巻いてもらう。腹帯は、オサンバサンや実母、姑などが用意する。ただし、オサンバサンに腹帯を巻いてもらうのは初子だけで、第2子以降は、自分で巻くことが多い。通例、この儀礼を「帯祝い」といい、何らかのかたちで供食の儀礼を伴う。親戚や近隣の人々を招いて饗応することもあれば、実家からモチなどの食物が妊婦に贈られることもある。しかし、石川町においてはただ、腹帯を巻くということにとどまっているようである。この腹帯には、白のさらしか、マメシボリを用いる。また、少数ではあるが、「建て前の五色の旗」や「夫のフンドシ」を巻くということもあったようである。腹帯の長さは7尺5寸3分で、「七、五、三」という「めでたい」数で縁起をかつぐのだという。あるいは、さらしを半反巻くということもある。

腹帯の医学的な効用については「正しい姿勢を保ち、腰痛を和らげる」・「腹部の保温と保護」などがあげられるが⁽¹⁾、町の人々によれば「ハラゴ（胎児）を大きくさせない」と、「産後の悪い血があがるのを防ぐ」働きがあるのだという。

「ハラゴを大きくさせない」理由は2つある。1つは、ハラゴが大きいと難産になるので、小さく産んで大きく育てるのである。したがって、長風呂をするなどのように腹帯を巻いていない状態は戒められた。もう1つは、妊婦のおなか大きい姿というのは、みっともないものと考えられており、「恥

ずかしかったから一生懸命かくした」のだという。今日の妊婦の姿とは、実に対象的なことである。

ところで、妊娠中は体をよく動かすことを奨励することが多い。これは、「働かないとお産が難しくなる。無理をしないようにして働きなさい。」と経産者、とくに実母や姑から言われているためである。例えば、雑巾がけや便所掃除を励行したという。なお、便所掃除をすると美しい子が産まれるともいわれた。同様に、「モチをきれいに丸める」、「めんこいワラジ（可愛らしいワラジ）をつくる」と美しい子が産まれるともいわれた。

この他にも、「火事を見ると赤あざができる」、「死人を見るときは、鏡を懐に入れる。また、腹部に手を当ててはいけぬ」、「モダラ（藁のたわし）を大きく作ると難産する」という俗信がある。

さらに、食物を制限するものもある。たとえば、「柿や蕎麦は冷える」、「兎の肉はミツクチ（兎口）になる」、「油ものは子供にクサ（クサッポとも。瘡、できもの）ができる」などがあげられる。しかし、今日のような飽食の時代ではなかったから、それほど気にはせず、何でも食べたという。また、「クセ（つわり）がひどいときは、酸っぱいものが食べたかったが、今みたいにミカンなんてなかったから、青梅を食べた」という。

こうして、妊婦たちは新しい生命の誕生を待ったのである。

2 出産と産後

今日、出産関係の書籍、雑誌は多く出版されており、妊娠の仕組みから産後の生活にいたるまで、丁寧に詳しく解説されている。女性は、自らの必要に応じて情報を選択し、様々な知識を得ることができるのである。

ところで、それら多くの出版物から「陣痛が始まったら……」という言葉拾っていくと、ほとんど「陣痛の間隔が長いうちに車で病院へ行きましょう」と続くといっても過言ではない。すなわち今日、出産は妊娠から分娩まで「病院で」するという常識があるのである。

しかし、石川町に限らず、戦後しばらくは自宅出産が主流であった。「家で

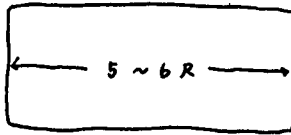
する出産」が常識だったのである。病院へ行くのは、初産や難産の心配があるときであった。石川町では初子は実家で、第2子以降は自宅で出産した。大正時代頃まではナンドに21把の藁を敷き、その上で出産に臨むこともあった。その場合、正座して腰を浮かすような格好で、チカラシモ(力紐)にすがったり、後ろからオサンバサン(ときには夫も)に抱えてもらったりして産んだ(図3)。

図3 産みの姿勢



坐座一足を広げて正座し、腰を浮かせる。

- ① 布で布団カバーを作る



- ② 穂を取った藁を用意する

- ③ ②を①に入れて



- ④ シビプトンのできあがり

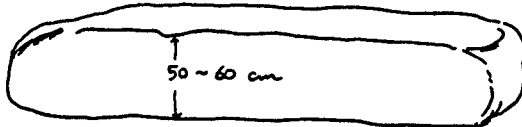


図4 シビプトン

それから戦後までは、有資格者のオサンバサンたちによって、衛生面などでの指導が行われ、ザシキにシビプトン（藁の布団・図4）や日常使用している布団を敷き、その上で出産するようになった。また、分娩時の姿勢も坐産から仰臥位へと変わっていった。

そして、戦後から次第に、自宅出産から病院での出産へと移っていったのである。

また、出産の変遷とともに、エナ（胞衣）やへその緒の処理の仕方も変化していった。

一般に、へその緒の切除には金属を用いないとするところが多い。石川町においてもかつては麻が使われていたらしいが確認までは至っていない。しかし、既述したように石川町のオサンバサンは、当時の最先端の医療器具を用いて出産の介助をしていたのだから、それは当然といえるかも知れない。そのほか、へその緒に関する俗信としては、身につけていると戦場で弾に当たらないなど、お守りにすることが多い。また大病をしたときに煎じて飲むと九死に一生を得るなどともいわれる。石川町において煎じて飲んだという例は確認していないが、80歳ぐらいの男性が、今から20年ほど前に病院で右上腕部にはめ込んでもらったことがあるという⁽²⁾。

エナの処理はオサンバサンがする。ボロ布や新聞紙に包み、父親が墓の西の一隅へ北向きに埋めてくる。地域によっては、子供が初めに踏んだものを恐れるといわれ父親が踏む場合があるが、石川町では、とくに父親が踏むということはないようである。ただし、埋め方が悪いと夜泣きをするといわれている。以上が出産するまでの習俗である。

次に、産後の習俗について産婦を中心に述べていきたい。

一般に出産は「血のケガレ」があると考えられているため、地域ごとにさまざまな忌みの習俗があり、その期間は何らかの制約を受ける。また、ケガレは産婦がもっとも重く、次に生児や家族が負うと考えられている。石川町における産の忌みの期間は、21日間である。この期間は、21把の藁を敷いて出産していたことの名残ではないだろうか。なぜ、「21」なのかについては不明だが、同県相馬郡新地町の事例によれば、藁21把を敷き詰めるとち

ようど1畳分の広さになるという。また産後は「悪い血が下りるまで横になってはいけない」といわれ、それを丸めてよりかかって体を休めた。そして、1日1把ずつぬいていくと、21日目に薬束はなくなり、横になることができるようになるのである。これは、石川町においても同様にいられているから、21把薬を敷いたことと、忌みの期間21日とは、関係があるのだろう。なお、この21日目をオビヤまたはヒアキ、ヒアケと呼ぶ。

この期間は、前述したように行動の面でも、食物の面でも制約を受ける。例えば、産婦は水辺（ナガシ・井戸）やイロリに近付かない、外出を避けるなどといわれている。他へケガレをうつさぬようにと、外出は家族もできるだけ避けるようにする。しかし、これらは21日間厳密に守られるわけではなく、1週間程度のことであった。

産婦はさらに食物も制限された。油の多いものは子供にクサができる、青菜は子供のウンチが青くなる、小豆はそのようなおりものが下りる、カボチャや柿は冷えるなどといわれ、食べられなかった。また、産後の食事は実に質素なもので、おかゆに焼き塩かカツブシ（鯉節）をかけたものと、具の何も入らない味噌汁だけしか与えられなかったという。ただし、赤いイモガラは血が落ちつく、イワシの缶詰はお産のお見舞い品として喜ばれたという。

ところで、いわき市から石川町へは国道49号線や、主要地方道いわき石川線（かつての御斎所街道）など、いずれのコースをとっても、いくつかの小高い山を越えて行かなければならない（図1）。今日に至っても平坦な道路は整備されず、タンクなどの大型車も黒煙をあげて急勾配を上って行くしかないのである。かつて、いわきの魚介類を求めて峠を越えていった人々の苦難を思うとき、たとえ缶詰ではあってもイワシという魚がどれほど喜ばしいものであったか、察するに難くない。

また、モチを食べると母乳がよく出るともいわれた。今日のように人工栄養が豊富ではなかったから、母乳が出るか否かは生児にとって、死活問題である。したがって、あまったお乳はのぼるといけない（母乳が出なくなる）とされ、捨てるときは壁にぶちまけるようにして捨てられた。どうしても出ないときは、ヤギの乳や米の粉を溶いて与えたという。また、山橋地区では

母乳がよく出るようにと、銀杏の木にお参りに行き、イボをこよりでしばってくるという信仰もあったようである。

出産に携わるのはオサンバサンと、実母や姑などであるが産婦が1人きりで産むこともある。とくに、働かないと難産になるといわれていたから、妊婦たちは、出産直前までよく働いていた。その中には、田畑で陣痛が始まった場合もあり、その場で産み落としてしまった者や、帰宅した直後に産まれたということも少なくなかったという。また、オサンバサンを呼びに行くのはたいてい夫であるが、それが間に合わないときも珍しくはなかった。出産を介助するという行為が、オサンバサンの仕事である、すなわち謝礼の対象となるらしい。したがって、お産に間に合わなかったときは、そのまま帰されたこともあったそうだ。しかし話によれば、何もせずに帰るというわけにもいかなかったので、何らかの手当をしてあげたそうである。オサンバサンは、産後1週間産湯を使わせるために通い、お七夜のときに謝礼をもらったという。

3 安産祈願

お産の苦しみを表現したものに「陣子の棧が見えなくなると、子供は産まれない」というものがある。それくらいお産というものは大変なのだ、石川町の女性達は口々に語る。そうした不安な気持ちを少しでも落ちつけるために、そして、じょうぶな子供が授かるようにと、身籠もった女性達はさまざまな神々へ祈願に訪れる。

石川町では主に、隣接する玉川村字山小屋にある「オシヨウニンサマ（お聖人様）」と、石川町字新屋敷の「安産地藏」の2カ所に祈願に訪れる。両者とも現存し（図2）、今日でも参詣する人が少なくない。それぞれについて以下述べていきたい。

玉川村字山小屋のオシヨウニンサマへは、主に母畑地区や山橋地区の人々が訪れている。ここには、「オシヨウニンサマ」と呼ばれる行人を祀る祠堂があり、次のような縁起が記されている。

山小屋長寿院住職宥音ハ（宮城国生） 天正五年八月十日、当地二塚
ヲウガチ予言シテ我串柿一連ヲ食シ百日ヲ以ッテ、成仏シ火災産婦等ヲ
守護セント即チ塚ニ入り、日夜経文ヲ読ミ鐘ヲ鳴ラシ日ヲ追ッテ次第ニ
ソノ音絶エ遂ニ成仏セリト言ヒ伝。後ニ此処ヲ聖人塚ト称シ信者相計リ
一字ヲ建立シテ宥音堂ト名ツケ今日、尚参詣者絶エズ。

ここから、麻を一本もらってきて、産気づいたらハチマキのようにして頭
をしぼり、お産に臨むのだという。また、無事に産まれたら麻を倍にして返
す。妊娠五カ月前後の頃に、妊婦自身がお参りするということだが、祠堂は、
急な勾配を上って行かなければならないところに鎮座している。身重の体で
は至難であったと思われる。自動車の普及していない時代、どのようにして
参詣したのだろうか。何か作法などはなかったのか、今後詳しく調査してい
きたい点である。

次に、石川町字新屋敷は「安産地藏」と呼ばれ、主に沢田地区、山橋地区
の人々が訪れるが、北関東からも参詣にくる人が多い。参詣した折りには、
腹帯（半反の白いさらし）と麻、お札、御符（白ごま）をもらってくる。こ
の麻は出産のときに手首に巻くのだという。なお、縁起として次のような和
贊がある⁹⁾。

帰明頂禮地藏尊 石川郡の新屋敷 由来を詳しく尋ぬれば
国は大和の和尚とて 伝教大師の御弟子よ
三千世界を修行して 三部伝導大阿闍梨 頃は明和の三年よ
住居し給ふや大師さん 御本寺檀家の帰依となり
数多筆子を持ち給ひ 常に月日を送りしが
筆子呼び寄せ御遺言に 吾が身の命限す日は
頃は安永八年の 拾壹月の拾九日 安産守らせ給はんと
子安地藏と御シャクシ（錫杖か？） 御丈一尺七寸で
蓮華の上にと直られて 右の御手に数珠を持ち
左の御手に御玉持ち 御玉授かる其の日より
産月までの守り神 守らせ給ひの御請願 常に念ずる曹は
子は安々と保ち給ひ 難産とては更に無し

入棺入佛致しける 即身成佛致しける

御祈祷念仏有難や 御祈祷念仏有難や

縁起をみてもわかるようにこちらも、もともとは行人塚としての信仰があったものと考えられる。

東北地方では、ウブガミ（産神）は「山のカミ」であることが多いが、石川町におけるウブガミの信仰は、行人塚と結びついている点に特色があるのではないだろうか。今後は、石川町におけるウブガミとしての山のカミの事例について調査し、「石川町のウブガミ」について考察していきたい。また、一般に山の神講などの女人講で安産祈願をすることが多いが、石川町における信仰的講集団での安産祈願については未詳である。隣接する平田村においては、現在でも山の神講での女性だけによる安産祈願が行われているという。その点も併せて調査して行きたい。

むすびにかえて

以上、石川町における出産の習俗について、出産にいたる過程、出産と産後にわけて報告をした。更に、出産に関わる信仰として、隣接する玉川村の「オショウニンサマ」と、字新屋敷の「安産地蔵」の2例を取り上げた。

冒頭の部分でふれたように、石川町は自由民権運動発祥の地であり、県内でも比較的早い時期に、明治の西洋文化が流入した町であるといえよう。それは、社会運動のみにとどまらず、人々の生活文化にも影響したと考えるべきであり、産育習俗も例外ではない。また、イワシの缶詰にみられるように、阿武隈山地を越えたいわき市や、隣接する諸地域との関係についても考慮する必要がある。本来ならば、そうした石川町の近代史を把握したうえで論述すべきであろう。しかし、未だその域に達していないために、偏った調査・報告になってしまったことは否めない。今後は、そうした点を考慮しながら、石川町の産育習俗について調査を進めていきたい。

石川町には多くの民俗が息づいているが、急速に失われつつあることもまた事実である。失われるものはせめて資料として残していきたいと思う。こ

れまでの石川町民諸氏の御協力を深く感謝するとともに、より正確な資料保存のためにも、多くの御教示を賜りたい。

〈註〉

1. 雨森良彦 1992 『はじめての妊娠と出産』 成美堂出版 p 112,113
2. 同県相馬郡新地町においても同じ頃、同様に仙台の病院で右上腕部にへその緒をはめ込んでもらったという事例を採取したことがある。自身を守るために「へその緒を体内に戻す」、という意味の呪術的な行為らしいが詳細は不明。
3. 石川町文化財保護審議委員長三森武夫氏の採集によるもの(1979)である。

〈参考文献〉

- 荒井 良 1976 『胎児の環境としての母胎』 岩波新書
- 池上 廣正 1991 「人と神」「自然と神」『宗教民俗学の研究』
名著出版 p 208～223, p 224～244
- 井坂 康二 1988 「産神が産の穢を忌まない理由」『人生の諸問題』
御影史研究会 p 331～349
- 井之口章次 1959 「誕生と育児」「幼少年期」『日本民俗学大系・4』
平凡社 p 189～212
- 大藤 ゆき 1968 『児やらい』
1979 「産神と産屋」『講座日本の民俗宗教・1』
弘文堂 p 278～293

恩賜財団母子愛育会編

- 1965 『日本産育習俗資料集成』 第一法規
- 鎌田 久子 1990 『女の力』
1990 『日本人の子産み・子育て』 勁草書房
- 瀬川 清子 1980 『女の民俗誌』 東書選書

- 波平恵美子 1992 『ケガレの構造』 青士社
- 服藤 早苗 1991 『平安朝の母と子』 中公新書
- 松岡 悦子 1985 『出産の文化人類学（増補改訂版）』 海鳴社
- 宮田 登 1979 『神の民俗誌』 岩波新書
- 1988 『靈魂の民俗学』 日本エディタスクール出版部
- 柳田 国男 1946 「家閑談」『柳田国男全集 12』 ちくま文庫 p 275 ~ 461
- 1954 「月曜通信」『柳田国男全集 16』 ちくま文庫
p 395 ~ 525
- 吉村 典子 1992 『子どもを産む』 岩波新書
- 脇田 晴子 1985 『母性を問う（上）』 人文書院